HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	李, 乃琦
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12958号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70224
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Naiqi_Li_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　李　乃琦

学位論文題名
一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究

・本論文の観点と方法

『一切経音義』は三蔵法師玄奘による仏典漢訳の場にあって文字学を担当した玄応が編纂した辞書体の書物であり、唐代 7 世紀中葉に成立した。中国では古版本、日本では古写本に基づく研究が行われてきたが、それらを総合した研究はなかった。本論文は、約 40 万字に及ぶ本文を収録する「一切経音義全文データベース」の構築に基づき、日本古写本の系統を解明し、日本古辞書（『類聚名義抄』、『新撰字鏡』）における『一切経音義』利用の実態を解明することを目的としたものである。

日本の辞書編纂史は、平安時代から始まり、現在まで続いているが、辞書編纂の萌芽の時代にあっては、参照が可能である資料が限られていた。それらの資料では、中国からもたらされた文献が多くを占めており、日本辞書の源流を遡る際に、中国文献の検証を避けることはできない。

本研究は中国文献の利用という視点から、日本古辞書についての考察を試みる。古辞書といえば、平安時代漢和辞書の双璧として広く知られているのは『新撰字鏡』と『類聚名義抄』である。『新撰字鏡』（天治本）は現存する日本最古の漢和辞書であり、最初に『一切経音義』を利用する利便性を目指して成立したものである。その後、編纂された『類聚名義抄』（図書寮本）は平安時代の音義書を集大成するものであり、130 種以上の出典が明記され、多数の文献を利用したことが窺える。その中で引用数が最も多いのが『一切経音義』である。よって、この両者の共通点として、最初に注目すべき点は『一切経音義』の利用である。

なぜ『一切経音義』は日本で辞書編纂の根幹資料として使われていたのか。それは、『一切経音義』の成立背景と網羅的内容と深く関わっている。唐代に玄奘がインドから大量の仏典をもたらした。7 世紀の僧侶である玄応は玄奘の訳場で仏典を翻訳する際に、その中に難字難語が大量に存することから、それらについて解釈するため、『一切経音義』を編纂した。『一切経音義』は中国に現存する最古の仏典音義であり、450 部以上の仏典に対して約一万項目を収録している。それらの言葉を解釈するために、仏典のみならず、『爾雅』・『説文解字』など大量の漢籍を引用した。当時、翻訳された仏典の伝播に伴い、『一切経音義』も広く伝わった。現在残されている『一切経音義』は版本と写本の二種類である。版本は、中国の磧砂蔵、金蔵などがあり、写本は、日本の古写本とイギリス・フランス・ドイツ・ロシアの敦煌・吐魯蕃断片群が存する。それらのうち、中国の版本と日本の写本が異なる系統に依拠して成立したということは、これまで定説とされてきた。近年、『一切経音義』の日本古写本が大量に紹介・複製されるに至り、日本古写本の系統を本格的に検討することが可能となった。

・本論文の内容

『一切経音義』が日本に伝来した後、どのように利用されたのか。特に、日本古辞書の編纂にどのような影響を与えたのかを解明することを本研究の目的として以下の研究を行い、これを第一部研究篇とした。この研究の基礎となる「一切経音義全文データベース」とその構築方法とデータサ

ンプル等をまとめ第二部資料篇とした。

第一部研究篇の各章における検討内容は次のとおりである。

第１章では、まず『一切経音義』写本と版本についての研究成果をまとめた。次に、日本平安時代古辞書の代表としての『類聚名義抄』と『新撰字鏡』について、成書の経緯・構成・現存本などについて紹介し、さらに、両者の共通出典としての『一切経音義』との関係についての研究成果をまとめた。その上で、本論の研究対象を『一切経音義』日本古写本、図書寮本『類聚名義抄』、天治本『新撰字鏡』とした。一方、図書寮本『類聚名義抄』は漢文注を重視し、出典を明記する編纂方針であり、天治本『新撰字鏡』は各文献を混在する構成であり、両者に対して行う研究はそれぞれの性質に合わせて、別々に定めることとした。

第２章では、現存する『一切経音義』古写本について紹介し、さらに「一切経音義全文データベース」の構築時に利用する資料を紹介した。『一切経音義』の構成により、経目名と本文との系統分類をそれぞれ試みた。その結果、『一切経音義』日本古写本を三つの系統に分けた。すなわち、高麗本系統【高麗本、七寺本Ａ（巻第一～巻第十、巻第十三、巻第十四）】、大治本系統【金剛寺本、大治本、七寺本Ｂ（巻第十二、巻第十五（東大本）、巻第十六～巻第十八、巻第二十一、巻第二十三～巻第二十五）】、石山寺本系統【西方寺本、広大本、天理本、京大本】である（【】内の諸本は残存点数の多い順に記載）。一方、七寺本は各巻によって系統が異なり、七寺本の書写形式と合わせて検討した結果、七寺本が取り合わせ本であることを解明した。

第３章では、既に分類した『一切経音義』日本古写本の各系統を『類聚名義抄』と照合し、異文の内容について分析した上で、各系統の独自異文が『類聚名義抄』に見られることを明らかにした。各系統と『類聚名義抄』との対応する項目数とその中の不一致の項目数を統計した。その結果、不一致率の順は高麗本系統＞石山寺本系統＞大治本系統となった。これによって、『類聚名義抄』が編纂された時、利用された『一切経音義』は大治本系統に最も近いことが判明した。

第４章では、『一切経音義』と『新撰字鏡』との照合を行った。『新撰字鏡』には注文の出典が明記されていないため、『一切経音義』の独自注文がある独自項目を取り上げて比較した。さらに、その結果を検証するため、共通項目の独自注文との照合を試みた。その結果、『新撰字鏡』の依拠本は高麗本系統に近いことがわかった。この結果を踏まえて、『新撰字鏡』の利用した『一切経音義』が伝承されていない理由について検討した。

第５章では、同じ写本である『一切経音義』の敦煌・吐魯蕃断片群に着目した。それらについての先行研究と現存する断片群の目録をまとめた上で、『一切経音義』日本古写本との比較する研究対象を決めた。それは、断片群の中で、項目数が最も多い P.2901 と、前後の書写形式が異なるΦ230 である。そのあと、両者を別々に『一切経音義』日本古写本との比較を行った。それにより、両者の編纂方針と独自性を明らかにした。

第二部資料篇は３章からなる。第１章では「一切経音義全文データベース」の構築方法、第２章では「一切経音義全文データベース」から『一切経音義』巻第九を具体例として、特に問題となる項目の本文を諸本対照して示した。第３章では図書寮本『類聚名義抄』所引の『一切経音義』の対照表を収録して立論の根拠とした。

『一切経音義』日本古写本を全て電子テキスト化した「一切経音義全文データベース」を構築して、それら古写本の系統を分類したこと、古写本の系統分類を基礎にして『一切経音義』と平安時代古辞書とを照合してその編纂方法を明らかにしたことが本研究の成果であり、この成果は日本の辞書編纂史の再検討につなげることが十分に期待できることを述べた。